

ナゴヤエント

幼いころは意味もわからず、口移して謡を習った。高校時代は自由な進路を語る友の姿に、なぜ自分だけ、と思うこともあった。能楽シテ方観世流・久田勘吉郎、20歳。「今は自ら定めて歩む道。能の奥深さを思いつつ稽古を重ね、能楽堂でお客様を前に謡い、演じる緊張感は、何ものにもかえがたいから」。若手を集めた名古屋能楽堂「若獅子の会」で3月14日、人気曲「土蜘蛛」に初めて挑む。

能楽師・久田勘吉郎 「土蜘蛛」

名古屋が地盤の能楽シテ方・久田勘吉郎の長男に生まれ、現在は東京芸術大邦楽科で学ぶ。父が演じる姿を幼いころから見てきた「土蜘蛛」は、「(直立不動のまま後ろに倒れる)仏倒れが派手で、格好よくて」。憧れだった曲への挑戦の前に、「見るには楽しいが、シテ方の重要な要素が幾つも含まれ、いざ演じると難しい。少しでも父に近

づけるよう、試行錯誤を続け「す」と気を引き締める。能発祥の地・関西と東京に挟まれ、名古屋で活動する能楽師は少ない。勘吉郎の東京芸大進学も「同世代のシテ方がいない環境を離れ、芸道を志す学生も多い大学で切磋琢磨させたい」と、勘吉郎が親心で勧めた。「能にはコンクールもオーディションもない。能の家に生ま

れば闘う必要もないから競争心も育たない」と勘吉郎。だからこそ息子には10歳で子方の卒業曲「烏帽子折」、その後も「鷲」「乱」と、難曲大曲を次々ひらかせた。試練に挑み、評価を謙虚に受けとめることで己の力を常に確認させてきた。

「僕は能楽師としては歩き始めたばかり」と勘吉郎。「まだ自分のことで精いっぱいだが、大学で学ぶことと家で習ってきただことは異なり、それが新鮮で面白い。その違いを見極めた上で自分なりのものを作りあげ、広い視野で将来の能楽を支える一人になれたらと思います」

午後1時開演、4千円、3千円。学生2千円。当日各500円増し。3月1日午後1時、名古屋・大須の万松寺から大須観音まで勘吉郎ら出演者が練り歩く。「能楽にない御練りだが、積極的に街に出て観客と出会わなければ」と勘吉郎。公演問い合わせ0332-734-0192

(名古屋能楽堂振興協会事務局)。

(西本ゆか)



久田勘吉郎(前)と父の勘吉郎

父の背追い 挑む難曲